

# Science journalism: Toppling the priesthood

## 科学ジャーナリズムの「聖職者モデル」を超えて

Toby Murcott Nature Vol. 459(1054-1055)/25 June 2009

科学ジャーナリストにきちんとした批評をさせるには、科学的知見の生成過程を開示する必要がある。

科学報道には一定のリズムがあって、大手メディアにいればそのリズムは簡単にわかるし、科学ジャーナリストなら誰でも知っている。そのリズムとは、*Science*、*The Lancet*、*Nature* といったメジャーな査読論文誌の発行サイクルが生み出すものである。メールボックスに研究成果に関するプレスリリースが届くと、ジャーナリストは、話題性の有無を調べ、最も報道価値のあるものを選び出し、担当編集者に提案する。そして、科学ニュースが作られていくのである。

これはほとんど日常的なやり方だ。英国のジャーナリスト Nick Davies が、その著書『Flat Earth News』で指摘しているように、すべての分野に関する報道において、プレスリリースが中心的な役割を果たすケースは非常に多い。もちろん、ジャーナリストは、テーマとの距離感を保ち、単にプレスリリースの内容を報道するのではなく、批評を行い、その際には、問題の背景を説明し、幅広い観点から考察するよう訓練されている。ところが科学ジャーナリストにとっては、そのように記事を仕上げていくことが、特に難しい課題となっている。

我々科学ジャーナリストが読者に役立つ内容を報道するには、研究分野における新知見の位置づけを理解し、それぞれの新知見が重要かどうかを見極め、鋭い質問をするだけの知識と自信をもつ必要がある。私自身は、生化学の博士号を取得し、ポスドク研究を3年間行った経験があるので、私の専門分野での発見であれば、細かな技術論も無理なく理解できるだろう

し、研究の全般的な歴史、学説の展開、論争の現状も理解できると思う。この分野の第一人者が誰で異端者が誰なのかわかり、多数意見と少数意見を区別することもできるだろう。ところが、科学ジャーナリストの私に期待されていることは、生化学の報道にとどまらない。宇宙論、生態学、素粒子物理学、その他もろもろの研究分野における新知見についても報道できることが求められている。こうした分野の科学者の知識を利用するためには、まず、最適任の科学者を見つける必要があり、その学説と研究分野における位置づけを知らなければならない。これをすべて行うには時間を要するが、記者には時間的余裕のないことが多い。

このことが一因となって、かなり多くのジャーナリストが最小限の仕事、つまりプレスリリースの複製ですませるといった状況が生じている。多くのジャーナリストは、プレスリリースに記された主著者の1人に電話し、あるいは電子メールのやりとりで、わずかな補充質問をする。しかし、その研究テーマに取り組むようになった理由やそのテーマの全体的な位置づけなど、詳しく報じるだけの時間と専門知識に恵まれるケースはまれなのである。

科学分野以外のジャーナリストは、この科学ジャーナリズムの問題点を認識しており、やっかいな状況だと感じている。私がBBCワールドサービスの科学担当記者だったころ、ニュース編集室の一部の者は、口には出さなかったものの、科学ジャーナリストに対する日常的な失望感を



ILLUSTRATIONS BY J. FIELD

隠さなかった。新たに発表される論文に関する報道に、意味のある分析、詳細な検討や批判的コメントがなく、ただ科学者の発言を「翻訳」するだけになっている、と私の同僚は感じていた。

### 「聖職者」という感覚

このような姿は、ジャーナリストというよりも、権威ある情報源から情報をもってきて、信徒に伝える聖職者の姿に近いといえるかもしれない。

我々の役割を他分野のジャーナリストと比較するとき、この感覚はますます強くなる。例えば政治ジャーナリストは、政治討論で積極的な役割を果たし、政治過程の機微について熟練した意見を述べ、政策の長所、短所、隠れた危険を明確にする。政治家と対等の立場でインタビューし、その見解を追及し、特に、その発言の中から不一致点、矛盾点、誤りをあぶり出していく。ここのところは極めて重要である。

つまり、政治ジャーナリストは知識創造過程の積極的な参加者である。ところが科学ジャーナリストの場合、対等の立場で科学的討論をするには資格が必要なため、こうした参加の仕方ができない。科学ニュース報道が科学研究費や研究の優先順位に影響することはあるが、科学ジャーナリストは、科学的知見の生成過程のものには関与していない。この点でも、科学ジャーナリストは聖職者とよく似ている。聖職者は、神の活動自体にほとんど、あるいは全く影響しないし、神の存続にとって実際には必要とされていないのだ。

このような科学ジャーナリズムの「聖職者」モデルは打破される必要があるが、しかしそれは口でいうほど簡単ではない。より詳細な内容、背景説明と批評が求められる中で、現代のジャーナリストは時間的制約という悪条件を抱えているからである。それでも、「聖職者」モデルの打破に取りかかる魅力的な方法がないわけではない。それは、科学者自身が手を貸して、科学的知見の生成・審査という非常に人

間臭い過程を明るみに出し、科学者が絶対的権威という教会のような役割を演じられなくすることだ。また、大学や研究論文誌の広報担当者は、時間に追われて新知見や新発見に関する背景や状況に関する詳しい情報を入手できないジャーナリストに、そうした情報を提供することで助け船を出すことができるだろう。

これと並行して、科学ジャーナリズムは、政治ジャーナリズムあるいは文芸評論、芸術評論に似た役割を構築する必要がある。科学ジャーナリストは、その科学的知見を導き出した技術論を理解し、科学者相手におじけづかずに質問し、必要に応じて批判できるようになるため、専門知識の蓄積に意欲的である必要がある。

### 科学知識が作り上げられる過程

世界中の科学者、教育者、政策立案者が、一般市民による科学への理解や関心を高めるべきだと主張しているが、これは正論である。しかし多くの人々は、それは、例えば最新のゲノム配列の解読結果やハッブル望遠鏡で撮影された画像などの報道が増えることだと考えている。ジャーナリストも、そうした期待に応えて、その種の記事を書いている。しかし、一般市民が科学を本当に理解するには、科学知識が作り上げられる過程を理解することも含まれる。それは、科学者と研究論文誌の編集者が密接にかかわり合って、議論を重ねて論文を作り上げていくプロセスそのものである。より幅広い層の一般市民も、この過程を当然知るべきである。

ジャーナリズムは、歴史の第一草稿と称されることが多い。ところが、現代の科学ジャーナリズムの相当部分は、第二草稿あるいは第三草稿と考えられている。科学ジャーナリストは、国民生活の他の分野を報道する記者とは異なり、歴史的偉業の最初期の草稿を目撃することはできない。そうした草稿は、科学者内部だけの査読過程、いわゆるピアレビューの範囲内にとどまっているからである。

この問題に取り組む1つの方法として考えられることは、論文の最終稿とともに、匿名査読者のコメントをジャーナリストに閲覧させることである。このことは、論文誌が新知見を伝える方法論として重大な変更あるいは意味をもつことになるため、幅広く実施する前に、科学界で議論を深める必要があるだろう。ただ、*Biology Direct* など一部の論文誌では、既に論文の最終稿に加えて査読者のコメントも掲載している。結局のところ、私は、これが通例となることが、科学コミュニケーションにとって有益なことだと考えている。

論文誌に掲載された科学論文を読んでいると、その背景や今後の展開について、読者に感銘を与える話が数多くあるにもかかわらず、その論文が「最終的な言葉」と感じられてしまうことが多い。経験豊富なジャーナリストでないかぎり、そうした話を読み取ることはほとんど不可能で、論文の内容が、実は、批評、コメント、議論、主張、精緻化といった、広範な審査過程の賜物であることも感じ取ることはいできない。しかし、ジャーナリストがこの過程の中身を知ることができれば、より深みがあり、説得力のある話を読者に提供できるようになると思われる。また、一般メディアで頻繁にみられるような、すべての新知見を「ブレイクスルー」と報じる傾向、あるいは誘惑とでもいうべきものを弱めることにもつながるだろう。

査読過程に関する一般市民の認識を高めれば、我々すべてが恩恵を受けることができる。また、ジャーナリストが科学を報道する仕事をより徹底的に行いやすくなり、科学に関する一般市民の理解を深める上でも役立つに違いない。(菊川要 訳)

Toby Murcott は、ライター、放送キャスターで、元 BBC ワールドサービス科学担当記者。このエッセーの長編版は、2009年11月に Ashgate から出版される『Communicating Biological Sciences』に所収予定。